

保健体育科

〔I〕 高等学校体育における種目選択制授業の試み

(第一報)

天野菊三郎 原田 秀雄 北田明子

はじめに

保健体育科では52年度に一つの試みを行なった。すなわち、高等学校三年生の正課体育でとり上げる教材を、生徒自身に選択させて展開授業を実施した。高三に選択制をとり入れた主な理由は次のようである。

第一は生徒の学習意欲の問題で、高三では大学受験を目前にしているという心理的圧迫感から、体育の時間が息抜きとして受けとられ、消極的・受身的になりやすく、激しい運動は疲れるからと言って敬遠されがちである。また、高三の年齢では基礎的運動能力の発達も一応ピークを過ぎ、運動種目の得意不得意や好き嫌いの傾向がかなりはっきりしてきて、やりたくない運動が教材の場合には授業への参加意欲が低下しがちである。このような問題点は、教材を生徒達が選ぶということでかなりカバーできる。

第二の点は、学校体育とそれ以後のつながりの問題で、社会体育と呼ばれる場面へつながって行かないのは、施設や時間のゆとりの問題もあるが、小学校から高校まで、正課体育で行なってきたいろいろな身体運動(体操、スポーツ、ダンス、格技など)が、結局のところ自信をもって行なうほど生徒たちの身についたものになっていないことも影響しているように思われる。従来のやり方では、技術の水準をあげたりゲームのレベルを高めていくのは困難で、毎年同じレベルのくり返しになりがちである。スポーツの楽しさを知るにはある程度の技術修得がなされている必要がある。将来とも運動に親しみながら健康な生活を送れるように、基礎的スキルや習慣を身につけさせるとすることも学校体育の使命の一つであってよいだろう。運動に親しむという意味では、体育の授業がいつまでも鍛練的・強制的であったり、コマ切れのゲームだったので不十分である。生徒にとって、一つでも自信のもてる運動種目があるとか、おもしろそうやってみようと思う運動種目がいくつかあることなどが望ましいが、学習すべき教材を少なくして一種目に多くの時間がかけられれば、この問題もある程度は改善されると考えられる。

以上のような理由で選択制を実施するにあたって、

次の三点を授業の目標とした。

- (1) 今までの運動経験をもとに、より一層運動に関する理解や技能を深める。
- (2) 自分に適した運動を見つけ、将来とも運動に親しんでいくための知識や技能や基礎体力を身につける。
- (3) 自主的、積極的に運動に参加する習慣を身につける。

このように、今回の選択授業の試みはなかば意図的に、なかば対症療法的に始めたものであり、一年目の実践について経過及び成果を報告し、この試みを続けていくための手がかりとしたい。

1. 52年度選択授業実施の概要

①対象学年・人数

高三、3クラス、133名(男71女62)

②運動施設

グラウンド(サッカー場、野球場、200mトラック兼用)
 体育館(バレー・バスケット兼用コート2面)
 屋外コート(バレー・バスケット兼用コート2面)
 舗装コート(ハンド2面・テニス・バレー3面兼用)
 プール(25m 7コース)
 特別教室(畳敷54畳)

③年間計画と参加人数

<表1. 年間計画表>

	1期 4～6月(16)		2期 6～9月(16)		3期 9～11月(19)		4期 11～1月(15)	
	種目	人数	種目	人数	種目	人数	種目	人数
男子	ソフト	58人	水泳	15人	ハンド	40人	バスケ	28人
	柔道	13人	バレー	56人	卓球	31人	サッカー	43人
女子	バレー	42人	水泳	15人	バスケ	40人	ハンド	47人
	ソフト	20人	卓球	47人	バド	22人	バド	15人

()内は実授業時間数

登録は4期まで一括して年度はじめに行ない、各期の開始前に確認した。変更希望者はその時申し出ることになっている。変更した生徒は全期を通じて延8名であった。

④ 評価

評価の観点として生徒に示したのは次の5項目

- ア. 出席率…欠課と見学（参加率）
- イ. 参加意欲…積極性・自主性（態度）
- ウ. 社会性…指導性・協調性（態度）
- エ. 技能…目標達成度，進歩度
- オ. 知識・理解

評価点は他学年と同様，学期ごとに10段階で示した。2期4期は学期にまたがっているが，このために評価も二つの学期に分割して行なった。

⑤ その他

用具は原則として学校で用意することとし，初年度は次のような用具を購入した。

購入した用具・数		授業で消耗した数
卓球ラケット	50本	損傷なし
ピンポン球	5打	6ケ
バドラケット	30本	2本
ナイロン羽球	5打	2打
水鳥 羽球	2打	1打

2. 実施までの経過

① 第一回基礎調査

我々が選択授業を実施したいと考えて，第一に知らなければならないのは，生徒がやりたがっているのはどんな運動種目か，どの程度希望が集中するのかという点である。第一回の基礎調査は次のような授業のアウトラインを示してアンケートを実施した。（表2）

- ア. 指導者の数から，同時4展開までとする。
- イ. 年間を4期に分け，一人4種目を学習する。
- ウ. 用具は原則として学校で用意する。

<表2. 第1回アンケート>

次にあげる各教材のうち，各期ごとにあなたが選択しようと思うものを1つずつ選んで○でかこみなさい。

1 期	2 期	3 期	4 期
4～5月	6～9月15日	9月16日～10月	11～1月
バレー	バレー	サッカー	サッカー
ソフト	ソフト	ハンド	ハンド
バド	バド	バド	バド
テニス	テニス	テニス	バスケット
卓球	卓球	卓球	卓球
柔道	柔道	柔道	柔道
ダンス	ダンス	ダンス	ダンス
体操	体操	体操	
	水泳	バスケット	
		陸上競技	

年間を4期としたのは，生徒になるべく一つの種目を集中して学習させ，かつ，その種類を多くしたいという，両方の要求の兼ね合いから，最大限4種目ぐらいが適当であろうと考えたからである。また，体育の年間授業時間数が51年度高三では76時間であり，4期に分けた場合，1期が約6週づつという時間配当になり，シーズンとしてみても適当だろうと考えたからである。それぞれの期に選択肢として列挙した教材は，51年度までの高校年間計画の運動種目（表3）に準じたものであり，また，現在の施設・用具の状況から考えて可能な範囲のものである。アンケートの結果，体操，陸上，ダンスの選択者が少なく，これらを除いた種目を教材としてくみ合わせることにした。

<表3. 本校における高校1,2年体育年間授業計画>

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
男	徒手体操		水泳		陸上競技		球技				
子	器械体操						（サッカー ハンドボール バスケットボール）				
	バレーボール										
	柔道										
女子	男子と同じ										
	ダンス										

② 第二回調査

第二回目の調査では，先回希望の多かった種目を具体的にシーズンや施設を考えて4展開とし（表4），選択を行なわせた。その結果は表5のようで人数の凹凸が多く，展開の仕方（種目のくみ合せ）に問題が多いことが明らかであった。

③ 第三回調査

希望の多かった種目については，収容人数を多くするために2期間ずつ開設することにして，第三回アンケート調査を行なった。それと同時に，生徒がある種目を選んだり避けたりする理由は何か，選択の基準について調査した。（表6）

生徒が教材を選ぶ時に何を基準にしているかは，実際に授業を展開していく時には活気のあるなしに影響するし，場合によっては目的がすり変ってしまう怖れもあるだろう。

アンケートの結果はやはり人数に片寄りがあり，各期ともこのままでは調整がつきにくいことがよくわかった。結局，バレーボールといっても，男子バレー，女子バレーのように別の種目とみなす方が実際であったと反省した。選択の理由では，一番多かったのが「その運動が好きだから」次に多いのは「部活動等で経験があるから」という理由であり，なじみのある種目をえらびがちであることがわかる。特に軟式テニス

では、選択した者の80%以上が軟式テニス部の退部者で占められるという状態であった。その中には、勉強が忙しくなるのを理由に、2年生の1学期までで退部してしまった者が多く、部の埋め合わせを体育の授業に求めていることがわかる。部活動の代理を期待する者と、新しい種目を経験するために選んだ者との落差は大きい。

④ 第四回調査

今までの調査結果から、授業の構想を根本的に検討し直した結果、男女別に展開する必要があるという結論に達した。そこで改めて、選択授業にする目的を提示し、共通の意識をもたせた上で選択肢を示したところ、生徒の希望がほぼ満足できるようであったので、ようやく実施にふみ切った。(表1参照)

<表4. 第2回アンケート調査>

活動場所	1 期	2 期	3 期	4 期
体 育 館	バド	バド	卓 球	卓 球
舗 装 地 区	バレ	テニス	テニス	ハンド
屋外コート	/	バレ	バスケ	バスケ
グ ラ ン ド	ソフト	/	サッカー	サッカー
総 合 教 室	柔 道	/	/	/
プ ー ル	/	水 泳	/	/

<表5. 第2回アンケート結果>

先日行ないました2回目のアンケート結果は次の表のようでした。

	1 期			2 期			3 期			4 期		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
バド	9	23	32	11	18	29						
バレ	12	25	37	36	13	49						
ソフト	40	12*	52									
柔 道	10*	0	10									
テニス				7	17	24	10	17	27			
水 泳				14	13	27						
卓 球							31	11	42	6	13	19
バスケ							9*	33*	42	2*	7*	9
サッカー							19*	0	19	12*	0	12
ハンド										49*	41*	90

上の表で*印は、極端に人数が多すぎるか少なすぎで、このままでは実施できないものです。

<表6. 選択の主な理由>

あなたがそれぞれの期にその教材を選んだ理由はなぜですか。下の理由の中からあてはまると思うものを選んで、記号を記入して下さい。(一つだけでなくともかまいません)

理 由	頻度
イ 部やクラブで経験し、自信がある。	○
ロ 少しやった経験があり、興味がある。	○
ハ 中学のときやったことがある。	
ニ 家でやったことがある。	
ホ 今までやったことがない。	△
ヘ クラス対抗の球技大会に役立つ。	△
ト 部活動の延長である。	
チ その運動が好きだ。	◎
リ 仲のよい友達と一緒にやりたい。	+
ヌ 友達にさそわれた。	
ル 身体が弱いから。	
ヲ 身体を鍛えたい。	+
ワ らくそうだ。	
カ 指導者に魅力がある。	
ヨ 外に選ぶものがない。	△

◎…選んだ中で最も多かった ○…次に多かった
△…三番目に多かった +…四番目に多かった

3. 結果と考察

① 授業参加率

今回の選択授業を始めたのには、体育の授業を魅力あるものとして、生徒が積極的に授業に参加するようにさせたいという直接的な動機があった。そこで今年度の各期ごとの出席の様子を表にしたのが表7である。これに対し、50、51年度を中心に過去の欠課数を示したのが表8である。

表8の欠課数には、病気等の理由で比較的長期間欠課した数も含まれている。該当者は少数であり、ある学年に片寄っているということはないので、今回は他の欠課と同等に処理した。また、体育の授業では欠課とは別に、実技に参加せず授業を観察している場合を「見学」として扱っているが、見学の数は52年度の場合欠課数の約2倍程度の頻度である。「見学」はここでは出席扱いにして処理した。表8から、毎年一年生は出席率がよく高学年になるに従って欠課が多くなる傾向がわかる。さらに、表にはないが、一学期は出席率が高く、2・3学期と進むにつれて欠課が多くなる傾向

高等学校体育における種目選択制授業の試み

もある。この傾向は52年度の結果(表7)にも顕著にあらわれている。高三の12月以降という時期は、それぐらいゆとりがなくなるということかも知れない。表7・8から、参加率に関しては今回の試みの成果があがっているとみなしてよいだろう。ただし冬期の体育ではかなりの欠課があるのが依然として問題である。生徒の感想の中に、選択授業だと「遊びになってしまう」というものがあったが、遊びすなわち二次的なもの、暇な時にやるもの、というとらえ方がなされているのかも知れない。

② 意 欲

授業参加への一人一人の意欲はどうだったか。意欲の高まりは学習場面を活気づけ、学習効果も高める。意欲について自己評価したものをまとめたのが表9である。

この表に示されるように、意欲的だったと自己評価した者は、平均して70%以上になっている。この値は他学年・他年度と比較できないので成果とは言い切れ

ないが、かなり高いものである。意欲の高かった原因としては、生徒の感想が示すように、「自分が選んだのだから」「好きな種目だったので」ということであろう。表10は、自分で選んだ種目がやりたい種目だったかどうかを示したものである。

4期では、男子で、やりたい種目でなかった者が多いが、サッカーに人気なかったことが理由である。学年によって運動種目の興味に多少差があるのは止むを得ない。男子4期は意欲についてもやや低い。女子では3期バスケットの意欲が低かったが、これは天候が悪く、屋外コートを使用していたためコンディションが悪かったためと推測される。そしてこのように、あまり気の進まない者を20%ぐらい含んだまま授業を進めざるをえないという点で、展開授業の限界がある。

一方、授業として初めて行なった種目についてみると、表11に示す通り、選択した者の80~90%が意欲的にとり組んだことがわかる。積極的とり組みという面

<表7. 選択授業への参加率>

	1期(16h)				2期(16h)			3期(19h)				4期(15h)				全 体	
	柔道	ソフト	バレー	ソフト	水泳	バレー	卓球	水泳	ハンド	卓球	バスケット	バスケット	バスケット	サッカー	バドミントン		ハンド
参加人数(人)	13	58	42	20	15	56	47	15	40	31	40	22	28	43	15	47	133
延欠課数(時)	0	21	16	6	9	12	24	13	14	3	23	20	40	31	16	81	329
欠課率(%)	0	2.3	2.3	1.9	3.8	1.3	3.2	5.4	1.8	0.5	3.0	3.0	9.5	4.8	7.1	11.5	3.7
平均(%)	2.0				2.7			2.4				8.4					

<表8. 年度別学年別欠課数>

学年	年度	49	50	51	52
		1年	延欠課数(時)	230	259
	欠課率(%)	1.9	2.1	1.5	↘
2年	延欠課数(時)	266	582	424	292
	欠課率(%)	2.1	4.7	3.5	2.7
3年	延欠課数(時)	↘	586	791	329
	欠課率(%)	↘	6.0	8.0	3.7

(↘は学年進行)

<表9 意欲の自己評価> (数字は%)

程度	男子					女子				
	1	2	3	4	平均	1	2	3	4	平均
とても意欲的	34	29	44	23	79	30	36	28	42	76
まあまあ	52	48	38	46		53	43	36	36	
どちらとも	10	18	15	26	17	13	15	25	19	18
あまり	2	5	3	5	4	2	4	11	3	6
全然	2					2	2			

<表10 教材と興味の一致>

興味との一致	期	男					女					全
		1	2	3	4	平均	1	2	3	4	平均	
やりたい種目だった		79	74	87	69	77	92	77	81	91	85	81
やりたい種目がなくて困った		21	26	13	31	23	8	23	19	9	15	19

(数字は%)

からは、バド・卓球・テニスなどのスポーツをとり入れると効果が上ると期待できる。

③ 技術の修得

選択授業では一つの種目に15～19時間かけて学習しているのが大きな特徴である。従来のやり方だと、柔道を除いて一教材につき7～10時間を当てていた。従って今回は技術的にもかなり上達できると期待した。技術の進歩で言えば、卓球・バドなどは初めて経験する生徒も多く、上達の度合いが大きい。技術的に上達したと思うかどうかは表12に示されている。

これは自己評価なので、客観的には上達していても変化なしと感じる場合やその逆の場合もあり、数字だけでは断定できないが、教師による評価や生徒同士の相互評価でも、技術的にかなり進歩したことがうかがえる。特に、チームワークを要する場面で基礎技術を生かすことに進歩があったようである。技術の深まりは運動そのものの興味を増すし、理解も深まり、一層意欲を高めているのであろう。卓球とバドを選択した者の技術に対する自己評価は表13のようである。

卓球を選んだ者のうち、「卓球が得意な種目だから」という理由の者が男子で7名、女子で3名、同じくバドミントンでは3名であった。彼らの場合は技術進歩に関しては変化なしと受けとめている。

<表11 意欲—卓球・バドの場合>

意欲	卓球男子	卓球女子	バド女子
意欲的だった	88	88	93
どちらとも言えない	8	7	7
意欲的でなかった	4	5	0
やむを得ず選択した	15	10	0

(数字は%)

<表12 技術修得の自己評価>

技術	男子	女子	全
とても上達した	10	13	66
少し上達した	52	58	
変化なし	38	29	34

(数字は%)

<表13 技術修得—卓球・バドの場合>

技 術	卓球男子		卓球女子		バド女子	
	実数人	%	実数人	%	実数人	%
とても上達した	6	22	5	13	10	33
少し上達した	12	44	28	70	15	50
変化なし	9	34	7	17	5	17

<表14 授業に対する感想>

(数字は%)

	男 子					女 子					男子卓球	女子卓球	女子バド
	1	2	3	4	平均	1	2	3	4	平均			
楽しかった・おもしろかった	75	67	79	59	70	74	72	57	83	71	85	80	90
どちらとも言えない	18	26	14	34	23	21	19	30	9	20	7	15	7
つまらない・いやだった	7	7	7	7	7	5	9	13	8	9	8	5	3

④ 満足感

表14は授業に対する生徒の感想をあらわしたものである。

表からわかるように、授業が楽しかったとする者が全体で70%を超える。卓球・バドではさらに高い値を示している。このことは、当然予想される結果ではあるが、選択の段階で教材に対する興味がなく、やむを得ず選んだ者の数に比べて、「つまらなかった」と感じた者の数が少ないのが成果と言えるかもしれない。選択制がある意味では見切り発車的な性格をもっていることが、感想からもうかがえる。

「楽しかった」主な理由は、男女全体では「その運動が好きだから」「得意だから」「グループの仲間と気が合ったから」というのが多く、卓球・バド選択者

では「技術がむつかしくてやりがいがあったから」「上達したから」「はじめてだったから」という理由が多かった。授業が楽しかったという感想は、課題が達成されたという充実感や、人間関係がうまくいったという安定感などを含んでいる。楽しい授業の追求は、積極的な面で必要であるが、「努力しないでもやっていける」とか「干渉されないからいい」とかいった面でもとらえてはならないだろう。

一方、「つまらない・いやだった」者の数は多くはないが、その理由としては「種目自体に興味をもてない」「ケガをした」「仲間と気が合わない」「チームの力に片寄りがある」などであった。これらは教師の指導法等の改善である程度解決できる点もあり、今後の課題である。

4. 反省と課題

52年度の展開授業をいろいろな方面から検討してみると、全体としては一応満足できる成果がえられた。生徒の側から今回の選択制をみたとき、はじめは何かととまどっていたようであったが、大部分の者は方法に改善の余地があるとしながらもこの方式を支持している。(表15)

〈表15 選択制についての支持〉

	男	女	全
だいたいこれでよい	59	79	68
種目の展開に問題がある	30	17	24
時期に問題がある	6	4	5
全体として問題がある	5	0	3

(数字は%)

しかし同時に問題点も多くあるので整理しておく。

① 選択の巾と内容

種目についての不満は種類が少ないという不満で、バドミントンのように同一種目を2期重ねて開設すると、一部では必修のような種目ができてしまう。嫌いな種目しか展開されていない場合、期間が長いだけに苦痛である。種目内容からみると、今年度の展開では陸上競技・体操などのトレーニング要素が欠けてしまうわけで、生徒にも一部その不満はみられた。また、施設やシーズンの関係などから開設したものの、生徒の興味が少ない場合には不満が多くなる。男子ではバドミントン、女子ではテニスの開設を望む者が多かった。これらの種目は、最初の調査の段階からかなりの希望数があったのであるが、使用コートなど、他の種目との兼ね合いから削除してしまったもので、今後工夫してゆかねばならない。

次年度ではどのような種目でどう展開するかについて、毎年希望調査してから決定する必要があるかどうかは疑問であるが、あと1・2年は種目の巾・内容ともに改善してゆくために希望調査を行ない、資料を積み重ねていく必要があろう。

② 時 期

時期で問題になるのは4期制をとることである。学校全体は3学期制をとっているため、区切りがくい違い、評価の時に不都合である。たとえば選択制も3期にして、シーズンと切り離せない水泳のような教材を夏の一定期間だけ全員に学習させるとか、学期に合わせて、各学期に2期づつの展開にするとかの工夫が必要である。「自由選択」という点で学習意欲が高いことを考え合わせると、一部必修という方式にも問題がありそうである。

時期に関する不満は、天候との関係が大きい。菜種梅雨、梅雨、秋雨の時期には活動時間が大巾に減少することが多い事や、ある種の運動には暑すぎる、寒すぎるということがあるなどである。特に、雨天の場合にも授業としてどのように充実させればよいかは、さし迫った課題である。雨天用のカリキュラムを別に用意する必要があるかもしれない。

③ 経験差・能力差

部・クラブ等で経験してきて能力も高い生徒と、いわゆる初心者とが同居していて構成員の能力に著しい差がある時、どのようなグループ編成をして授業を進めるかは問題である。それぞれの能力別グループの方が学習効果や意欲の点からもうまくいく場合が多いが、一部で部活動の延長のようになっていたりする怖れもある。また、人数が少なく能力別編成が実際上不可能な場合もある。評価する際にも問題が多い。一方、混合してチームを編成した場合、たとえば卓球ダブルスで、触球のたびにミスしてしまうようなパートナーだとしたら、お互いに楽しくやりにくい。意欲の低下につながっていくだろう。さらに、グループ間の能力差があるままで試合を続けた場合にも意欲に差がでている。これらの問題は、普段の体育の授業でも感じていることであるが、このような場面ではより尖鋭化してあらわれてくる。授業方法全体についての課題である。

④ 評 価

評価の方法は、出席率・態度・技能の三点から主に行なう予定であったが、生徒の大部分は出席率も高く、態度にもほとんど差がない。技能的にも「得意な種目だから」と集まったようなクラスでは、それほど差がないのが普通である。その上、たとえそのクラスの中では評価しうるほどに差があっても、教材の全くちがう他のクラスの能力と比較した上で評価することは不可能である。絶対評価ということで展開クラスごとに評価してきたが、実技では常に他人との比較においてみざるをえない面がある。各期各種目がなるべく同じ基準で評価できるような観点や方法はあるのかという点で問題が大きい。

選択授業の試みは、現行指導要領では「第二選択10~15%」に相当するわけだが、改訂後は選択の余地がもっとふえるものと思われる。そういう意味で今回の試みは指導要領の先取りのような形になっているが、手段としてのスポーツだけでなく、スポーツそれ自体を学ぶということも体育の中に当然含まれてよい筈である。高三では、発達段階や学年の特殊性から考えて、必ずしも陸上競技・水泳・体操等の鍛練的教材が必要ではないとして、本校では選択授業をはじめたわけである。従って、一方で「遊びになってしまう」とい

う生徒自身の反省のあることを、確実にとらえておかねばならない。

卒業後の自分とスポーツとの関わりあい、この授業の影響があったと思うという生徒の感想があった。今

後はそのあたりを手がかりに、教師の自己満足に終わらないよう、一年目の反省の上に立って、この試みを続けてゆきたいと思う。

(北田)